OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	乳癌の集団検診に関する研究 : 微研方式による成績
Author(s)	北村, 正次
Citation	大阪大学, 1974, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31270
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【10】

氏名・(本籍)	北村正次（きたむらまさつぐ）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第3134号
学位授与の日付	昭和49年5月10日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**乳癌の集団検診に関する研究** **—微研方式による成績—**
論文審査委員	(主査) 教授 石上 重行 (副査) 教授 重松 康　教授 関 悌四郎

論文内容の要旨

〔目　的〕

本邦婦人の乳癌による死亡率は，欧米に比しなお低いが，近年漸増のきざしがみられ近い将来には推計学的に子宮癌による死亡率を凌駕する可能性が指摘されている。

近年各種の癌の早期発見がさけばれ，その成績もしばしば発表されているが，乳癌に関するこの種の試みは，まだ極めて少ない。また微研外科における乳癌治療の成績をみても早期に発見されたものほどその予後は良好である。このような観点から，微研外科では昭和43年9月より主に吹田市および箕面市において，いわゆる微研方式による乳癌の集団検診を開始し，昭和48年8月でまる5年を経過した。この5年間にあげえた成績について吟味し，乳癌の集団検診の意義について検討を加えた。

〔方　法〕

受診者の動員は，吹田市では母子会，箕面市では医師会，市衛生課，衛生婦人会の協力により行った。また少数ではあるが，結核予防会の協力で大阪府共済組合員の婦人を対象とした検診も行った。

受診者の年令は30才以上の婦人とし，受診者各人に集検票を渡し年一回は受診することを原則とした。

第一次スクーリングは問診および視触診によって行い，乳房に異常を認めたものは，全例第二次スクリーングとしてマンモグラフィーを行い，更に第三次スクリーングとしては生検を行った。私はこの方法を微研方式と称している。

〔成　績〕

昭和43年9月より48年8月までの5年間の延受診者数は8,017名で，実受診者は5,433名であった。

受診者の年令分布の割合をみると20才台が10.4%，30才台が52.9%，40才台が27.4%，50才台が7.6%，60才台が1.7%で30才台をピークとする曲線を描いている。吹田市，箕面市の各地区別にみた受診者の年令分布も同様な傾向を示した。総受診者（延人数）のうちマンモグラフィーを施行したものは575名（7.2%）で，さらに生検を必要としたものは59名(0.74%)であった。

地区別にみると，吹田市での延受診者数 5,606名，実受診者数は3,688名，マンモグラフィー精検数は361名（6.4%），生検者数39名（0.7%），乳癌は6名（0.11%）であった。

箕面市では延受診者数は1,499名，実受診者数は833名，マンモグラフィー精検者数は154名（10.3%），生検者数は18名（1.20%）で乳癌は6名（0.40%）であった。

これら両市以外の地区で行った集検の成績では，延ならびに実受診者数912名，マンモグラフィー精検60例（6.6%），生検者数2名（0.22%），乳癌2名（0.22%）であった。

年度別受診率および再診率をみると，吹田市では上昇傾向にあるが，箕面市では増加はみられない。

延受診者数8,017名中14名（0.17%）の乳癌が発見され，これらの症例について検討を加えた。

年令別では，30才台5例，40才台6例，50才台2例，60才台1例で平均年令は44.1才であった。

腫瘤長径についてみると，2.0cm以下が4例で，2.1～5.0cmの腫瘤が10例であった。

stage別では，stage Iが8例，stage IIが3例，stage IIIが2例，stage IVが1例でありstage I が多い。

組織型分類では，乳頭腺管癌3例，髄様腺管癌1例，硬癌7例，小葉癌1例，不明2例であった。

リンパ節転移からみると，noが5例，n1αが4例，n2が2例，不明が3例であった。

14例の乳癌症例中，初回検診で発見されたものは9例（stage I 4例，stage II 2例，stage III 2例，stage IV 1例）で，残り5例は初回検診では異常なく，その後自身で乳房の異常に気付いて当科をおとずれており，stage Iが4例，stage IIが1例であった。その5例の病悩期間は3日～1月で平均10日であった。参考までに当外科において治療した乳癌症例238例の平均病悩期間は12ケ月であった。

〔総　括〕

① 吹田市および箕面市を中心として行った微研方式による乳癌の集団検診では，延受診者数8,017名，実受診者数は5,433名でそのうちマンモグラフィー精検を行ったものは575名（7.2%），さらに生検を行ったものは59名（0.74%）で，乳癌患者14名（0.17%）を発見した。

② 症例を分析すると，腫瘤長径が2cm以下のものが4例（29%）　り　微研外科の全乳癌症例におけるstage Iのしめる割合にくらべても，本集団検診のstage Iが多く，8例（57%）で早期発見に役立っている。

③ 一度でも集検を受けた者の乳癌に対する啓蒙度は高く集検受診後，乳癌が発生した場合の病悩期間は短かく平均わずか10日であり，進行度の低いものが多かった。

④ 乳癌の組織学的検索では，硬癌が組織診断の判明している12例中7例を占め多かった。また小葉癌1例が発見されたことは興味深い。

⑤ 我々の行っている微研方式は，比較的視触診の容易な日本人では多人数を経済的に検診することができ，マンモグラフィーを精検に用いることにより診断率を向上させ　無用の生検をさけること

が出来る。

⑥ 微研方式による乳癌の見落し等をなくするために全例マンモグラフィーの施行も考えられるが，経済的にも困難であるし，被曝の見地から考えても実施は好ましくないと考えられる。

⑦ 今後さらに残された課題は，受診者の動員方法の確立と再受診率の向上であると考えられる。

論文の審査結果の要旨

著者は，日本人に最も適した乳癌集団検診のモデルを作る一つの試みとして，微研方式なる検診法を設定し，大阪府吹田市，箕面市を中心に検診を行って来た。そして当初から5年間の集検の成績をふりかえって，その意義と今後の方向について考察している。

集検の意義については，この検診が乳癌の早期発見と乳癌に対する一般婦人の啓蒙に大きな役割を果し得たことを明らかにするとともに，微研方式による検診法の今後検討すべき点として触診時の見落しの可能性のあること，無腫瘤の乳癌の対策，再診率の向上をはかることを指摘した。なお現況では，検診しうる範囲に限度があるので，これの対策についても考察を加えた。

本論文の成績は，微研方式による検診の意義と今後なお検討を要する諸点を明らかにしたものであり，乳癌集団検診の研究ならびに推進について，重要な参考文献であると考えられる。